

2010年(平成22年) 10月17日発行

発行/名張市企画財政部広報対話室 〒518-0492 名張市鴻之台1-1
☎0595-63-7402 ❻64-2560 ✉info@city.nabari.mie.jp
http://www.city.nabari.lg.jp
携帯版 http://www.city.nabari.lg.jp/m_index.htm
バーコード読み取り対応の携帯電話端末から携帯版へ → 

▶ 主な内容 P1~5...特集 『若者魂、がまちを熱くする!』 P6~7...市民広報特派員レポート P7...暮らしの情報 P8...市民意識調査結果

特集

若者魂がまちを熱くする!

若者も「地域デビュー」しよう!



毎年、熱気に包まれる「NABARI ストリートフェスタ」。若い世代に魅力ある地域にしようとして若者自身が企画・運営する。上記写真で「BMX」を操るのがホットボイズン代表の新俊夫さん

いま、まちづくりの新たな担い手として、時間的にゆとりがあって、経験豊富な「団塊の世代」が注目され、多くの方が地域で活躍しています。一方、若者とはいえば、「仕事や子育てで忙しく、地域で活動する暇がない」という人も多いのでは。

しかし、若者たちが地域で活躍していけば、名張がさらに元気になっていくはず。「地域デビュー」は定年後でなくてもいい。若者の皆さんも、地域社会への一歩を踏み出してみませんか。

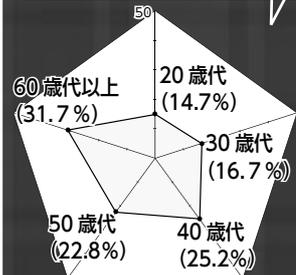


若者魂で名張を元気に!

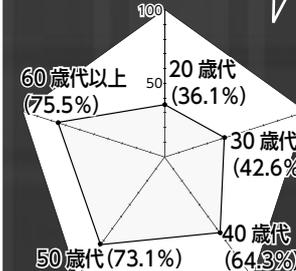
「自分たちが住むこの名張をもっと楽しいまちにしたい」。こんな思いで活動しているのは、「ホットボイズン」という20~30歳の若者による市民グループ。「BMX(自転車モトクロス」

20~30歳の若者は地域で活動する割合が低いのが現状です

「NPOやボランティアなど市民公益活動に参加している(したことがある)」とした年齢別割合



「地域づくり組織、区、自治会などの活動に参加している(したことがある)」とした年齢別の割合



■平成22年度市民意識調査より(20歳以上の市内在住者2030人を無作為抽出。8ページに関連記事)

「自分たちが住むこの名張をもっと楽しいまちにしたい」。こんな思いで活動しているのは、「ホットボイズン」という20~30歳の若者による市民グループ。「BMX(自転車モトクロス」や「スケボー」「ダンス」「バンド」といった「ストリートパフォーマンス」と呼ばれる活動の練習や表現の場を創ろうとしています。代表の新俊夫さん(31歳/美旗町の台)は話します。「活動場所がない」「見た目が派手というだけで市民権が得られない」と文句を言っているだけでなく、自分たちで行動に移すことが大切だと感じます。大変なこともあるけれど、楽しいこともいっぱいある。これから「ストリートパフォーマンス」を始めたいと思っている若者たちのためにも、練習場所の運営管理や、市民の皆さんに活動を理解いただくためのイベントを続けていきたいですね。「ホットボイズン」は、平成17年から毎年、市役所前の市民広場や総合体育館の駐車場で、「NABARI ストリートフェスタ」を開催。今年も、11月27日、「ストリートパフォーマンス」に関心のない人にも見てもらおうと、スパーマーケットの駐車場を会場に開催される予定です。また、最近では、地区の祭りや催しなど、市内のさまざまな場所でパフォーマンスを披露しています。

「若者にとって、やっぱり都会は魅力がある。でも、自分の生まれ育ったところを大切にしたいという思いがあります。だから、名張から転出した若者が帰郷したときに「なんか名張って楽しいまちになってきたんと違う?」って、驚かせてやりたいんです。世代の異なる人の手助けもいただきながら、熱い「若者魂」を持った仲間たちと、名張を活気づけていきたい」と新さんは意気込みます。

最近、市民活動支援センターには、「NPOを立ち上げたい」「名張をPRする活動をしたが、仲間をどう募りたいか」など、若者からもさまざまな相談が寄せられています。センター職員の本次和美さんはそんな若者の印象についてこう話します。「人のために、地域のために、何か活動したい」という若者がけっこういるんだなと感じています。活動の方向性さえ決まれば、行動力がある。活動の熱気もすごい!きっかけは何でもいいと思うんです。こうした若者たちが一歩踏み出して、まちづくりに加わっていくと、名張はもっと元気になっていくのではないのでしょうか」

【2ページ以降へ続く】

人口と世帯数
10月1日現在 ()は前月比

人口 82,739人(+9人) 男 39,938人(+7人) 女 42,801人(+2人)
世帯数 31,864世帯(+30世帯)

特集 若者魂が
まちを熱くする!



若者の熱き思い

20〜30歳代の人は地域で活動する割合が低いとはいえ、さまざまな分野で、きっかけで、そして、それぞれのペースでまわくりを担っています。そして、「人の役にたててうれしい」「やりがいを感じる」「活動することが楽しい」「自分が成長できる」。こうした熱い思いで活動を続けています。

子育てをみんなで支えあって楽しいものに

人形劇団「まんぶくまる」

水谷 由紀子さん
(33歳/桔梗が丘西)



子ども支援センターかがやきでは、毎月、コンサートや工作などのイベント「親子で遊ぼう」が開催されています。その多くは、ボランティア団体や「かがやき」の利用者自身が趣向を凝らして企画・実施しています。

「子育てをみんなで支えあって、楽しいものにしたい」と話すのは、3児の母で、「親子くらぶ」という子育てサークルに所属する水谷由紀子さん。

子どもが病気になったら…。お箸の使い方はどう教えられるのか…。サークルでは、子育ての悩みを話し合うこともしばしば。「自分の経験が、他の人の役に立つとうれしいですし、わたし自身も、先輩ママに勇気付けられたものです」と水谷さん。そんな彼女は、学生時代に人形劇部に所属。この経験を生かし、たくさんの人と子育ての楽しさを共有していこうと、サークルのメンバーを誘って「まんぶくまる」という人形劇団を立ち上げました。

物語の展開をグループで話し合ったり、舞台セットをつくったりしながら、練習を重ね、8月には、「かがやき」で人形劇を初披露。「たくさんの人に喜んでもらえて、本当にうれしかった。子どもが成長してからも、いろんな場所で続けていけるといいですね」と水谷さんは笑顔をのぞかせます。

「かがやき」の道岡多賀子センター長は話します。

「『かがやき』は、子育て中の皆さんにも支えられています。あたたかい人と人のつながりの中で子どもたちが育っていけるといいですね」



短野獅子神楽保存会

中上 弘次さん(36歳/短野)



獅子舞には、市内の各地区でさまざまな特徴があり、世代を超えて親しまれています。しかし、後継者不足から途絶えてしまう例も少なくありません。そんな中、郷土を愛する若者たちが立ち上がった地区があります。

「祭りといえば獅子舞。子どものころに親しんでいた獅子舞がなくなるのは寂しいですね」と話すのは、短野獅子神楽保存会の中上弘次さん。

短野地区の獅子舞は、伊賀地域では珍しい雄と雌の2頭舞。明治時代から続く伝統行事でしたが、若者の減少で2度にわたり中断。伝統を引き継いでほしいというOBの思いを受け、立ち上がったのが地区の若者たちでした。

「地区の獅子舞を復活させて今年で10年目。みんな獅子舞が大好きなんです。復活にあたり、舞の系統を同じくする伊賀地域中の獅子舞を研究したりしましたが、やはり地元舞には親しみや誇りがある。子どもたちも『大きくなったら自分たちもやりたい』と言ってくれるので、うれしいじゃないですか。いつか、伊賀地域中の獅子舞と一緒に舞うのが夢です」と中上さん。

現在、獅子舞を舞うメンバーは12人。うち、10人が20〜30歳代の若者たちで、普段は顔を合わさない地区の若者が集まるいい機会にもなっているようです。OBの一人山本正良さん(73歳/短野)は、「秋祭りに太鼓の音が無いと寂しかった。若い人が盛り上げてくれるのはありがたい」と喜んでいます。



20年もの間、地域に密着して取材している「伊賀タウン情報YOU」の記者に名張の若者の印象について伺いました。

若者の活動は、表舞台に出てこないことも多い。でも、取材活動の中で、実にいろんな若者がいることに気がかされます。

20年ほど前は、活動場所が少なかったのか、市外で活躍する若者の姿が目立っていましたが、最近は、名張で頑張る若者が多い。今年度で名張から撤退する皇學館大学の学生の存在も大きかったと思えますが、新町のやなせ宿でランチを提供したり、隠街道市に出店したりと、高校生地域での活動も目を引きまします。さらに、農業をやりたいと、名張にやってくる若者や、世界中を旅して最終的に故郷の名張で活動を始めた若者もいます。

若者取材すると、何かしら熱い気持ちをもっているのが、うらやましく感じることもあります。自分の好きな道を突き進む姿に共感を覚えますが、この力がまちづくりに向いていくと、まちはもっと盛り上がっていきはす。いま、人生経験豊富な世代の皆さんが地域で活躍されていますが、若者の熱いエネルギーと融合するとその可能性は広がっていく気がします。



伊賀タウン情報 YOU

田中 均 さん(記者歴20年)



NPO法人赤目の里山を育てる会
柴田綾さん(21歳/赤目町上三谷)

里道の草刈り、木の間伐、倒木の除去…。森の手入れをし、里山を守り、育てていくためには人手も必要です。赤目の上三谷地区には、全国から、いや、世界各国から、里山を守ろうと、たくさんの方々たちが集まっています。

「豊かな自然と里山を守るという活動に興味があったので、名張で活動することにしました」と話すのは、NPO法人赤目の里山を育てる会の柴田綾さん。農林水産省の農村活性化人材育成派遣支援モデル事業に応募。今年、北海道札幌市から名張へ移り住んできました。

柴田さんは、里道の草刈りなどのほか、里山の資源を活用して運営されている通所介護施設や障害者就労施設でも活動しています。「名張には知り合いもいなくて心細かったけれど、いまは、人に喜んでもらえる喜びを感じる毎日。とっても充実感があります。里山を育てるノウハウはもちろん、自分を精神的に強くするためにいろんなことを学んで吸収したい」と意欲をみせます。

赤目の里山を育てる会は、他のNPO法人が主催するワークキャンプを共催。全国はもちろん、海外からも、若者たちが、さまざまな思いを胸に赤目の里山に集まっています。

「里山を守り、育てていくためには、継続性が大切。それだけに、わたしたち若者も積極的に取り組んでいく必要があると思います。ここに来る若者たちと交流しながら、豊かな自然の残る名張で、活動を続けたい」と柴田さんは目を輝かせていました。



(社)名張青年会議所 理事長
西山剛さん(39歳/東町)

20歳から40歳までの若者だけで構成される名張青年会議所。小学生を対象とした「防災運動会」や、市内初となる市長選挙の公開討論会を開催するなど、新しい視点でまちづくりに取り組んでいます。

「へえ～。毛布が担架になるんや。家でもやってみよう」。毛布と2本の物干しざおで担架を作って人形を運ぶ体験や、「地震が起きたら、布団をかぶってかくれる？」などの「防火防災〇×クイズ」に子どもたちは生き生きとした表情をみせます。これは、小学生にゲーム感覚で防災を学んでもらおうと、名張青年会議所が9月に開催した「防災運動会」での一コマ。

「防災運動会」は初めての試みでしたが、約100人もの児童の参加があり、大成功でした。現在、名張青年会議所のメンバーは19人。わたしたちは、失敗をおそれず、若い発想で新たなまちづくりに挑戦を続けています。そして、こうした取組みは、次代を担う人材を育む絶好の機会にもなっていると思います」と理事長の西山剛さん。3月には、政策で判断して投票する機会を増やそうと、市内で初めてとなる市長選挙候補者の公開討論会も手がけました。

25歳で青年会議所のメンバーとなり、来年で青年会議所を引退するという西山さん。「若いころから培ってきたチャレンジ精神や『人のために何かしたい』という気持ちを大切に、今後も積極的にまちづくりにかかわっていききたい」としっかりとした口調で話してくれました。



失敗をおそれず、若い発想で新しいことに挑戦



インターネット上のあみこ
向本あゆみさん(28歳/上本町)

人を結びつけるツールとして、SNS(ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス=インターネットの会員制交流サイト)が注目を浴びています。名張でも、SNSで知り合った若者が、名張川沿いのごみ拾いに汗を流しています。

「来月はこの日にごみ拾いをします」。こうしたインターネット上の書き込みを見て、月に一度、若者たちが名張川沿いに集まります。

呼びかけ人は、以前は家にこもりがちだったという向本あゆみさん。ある講演会で「微力でも動けば、未来は変わる」といった話を聞いたのがきっかけでした。「自分も何かの役に立つことができないか」と奮い立ち、体ひとつで、手軽にできること、と思いついたのがごみ拾いだったのです。

それから4年もの間、活動を続けている向本さん。「活動の後は、とっても清々しい気持ちになれるんです。自分自身のためにも、一歩踏み出せてよかったと思います。でも、一人では続けられなかった。インターネットで募った仲間のおかげです。今後も、できる範囲で活動を続けたい」と話します。

気負わずに地道に活動を続ける彼女たちの姿を見て、今年から活動の輪に加わった竹中淑博さん(72歳/柳原町)は話します。

「彼女たちが、お互いの名前も知らずに活動していたことには驚かされましたが、だれかに頼まれたわけでもなく、自主的に活動をしている。とても素晴らしいじゃありませんか」



インターネットで募った仲間と一緒にごみ拾い



若者と新しい公

「自分たちのまちは自分たちでよくしていこう」。市では、こうした思いをカタチにする「新しい公」の仕組みづくりを進めています。若者の皆さんにとっても、地域で活躍する場が広がっているといえます。

地域で活動始めるきっかけとして…

インターネットを活用したり、相談窓口を訪れたりしてみる

名張市市民活動支援センター ☎ 63-5325

【場所】市民情報交流センター内(希中央)
【開館日】火～日曜日・祝日 午前9時～午後7時
※月曜日(祝日の場合その翌日)、年末年始は休館



http://www.emachi-nabari.jp/siminkatudou/

◎ホームページには、分野別の市民活動団体やイベント情報を掲載。センター内には、市民活動団体のチラシなどを掲示。市民活動に関する図書の見学・貸出もできます。



名張市ボランティアセンター ☎ 63-1111 (代)

【場所】総合福祉センター2階名張市社会福祉協議会内(丸之内)
【開館日】月～金曜日 午前8時30分～午後5時15分 ※祝日、年末年始は休館



http://www.nabarishakyo.jp/volunteer/

◎ホームページには、主に福祉関係の市民活動団体やボランティア募集情報を掲載。毎月、ボランティアアドバイザーによる相談コーナーも開設(日程などは、「広報なばり」1週号に掲載中の「社協だより」をご覧ください)。



講座や講習、イベントに参加してみる

上記ホームページのほか、地域の広報紙や「広報なばり」に掲載される地域づくり団体、市民活動団体が主催する講座、講習、イベントに参加するのも一つの方法です。

Pick Up

新しい公委託事業 高校生から30歳代までの受講生を募集 隠元気まち仕掛け人塾

市内で活躍している市民活動団体の活動発表を聞いたり、団体メンバーと語り合ったり…。希望者は、後日、市民活動体験もできます!

日時 10月24日(日) 午後1時～4時

場所 市民情報交流センター(希中央)

定員 30人程度 ◎申込・問い合わせは、前日までにNPO法人みどりの絆(☎ ☎ 48-6160 / ✉ wish-care@krc.biglobe.ne.jp)へ

若者が、地域で活躍する皆さんと出会うきっかけに

市民活動の活性化には若者の存在は欠かせません。でも、若者と地域の人が交流するきっかけは少ないのも事実。そこで、市民活動団体と若者が出会う場を設けました。

いまの若い人は高齢社会のまっただ中を生きていくこととなり、より人と人との支えあいが必要とされていくはず。市民活動は、その取組みの中で人と人とのつながりが生まれてくるのが大きな魅力です。こういう世界を若いうちに経験しておいてほしいですね。



NPO法人みどりの絆 石見 彰教さん

広がる「地域デビュー」の舞台

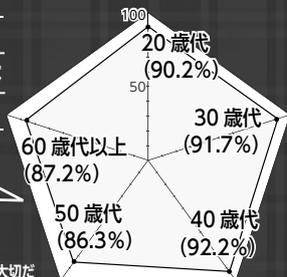
次はあなたの出番だ!

地域で活動したい若者の皆さんへ

「新しい公」とは行政だけでなく、市民、地域組織、市民活動団体、事業者などからも公的なサービスを受けられる社会のこと。市では、まちづくりのルールを定めた自治基本条例の制定や、市民活動支援センターの開設など、「新しい公」を担う皆さんの活動を応援しています。そんな中、地域では、福祉や環境、防災、教育、文化など多様な分野で、魅力ある活動が繰り広げられています。こうして「地域デビュー」の舞

台が広がる一方で、「地域にかかわることは少なく、活動を始めるきっかけがない」という若者も多いため。まずは、「得意なこと」「やってみよう」という「学んでいる(いた)こと」を切り口に活動を探してみよう。 「新しい公」の取組みを進めていく原動力となるのは、皆さんの「自分たちのために」「地域のために」という熱い思いです。そして、今回ご紹介した若者たちのように、やりがいを感じたり、楽しんでいたりしながら、こうした思いを行動に移していくことなのです。

「新しい公」の取組みが必要と考えている若者は少なくはないです



「新しい公」の取組みが必要と考えている人の年齢別割合

※「新しい公」を大いに進めるべき「大切だ」と思うが、まず考え方を広めていくべき」とした人の割合

若者の皆さんも「新しい公」の取組みに参画を

少子高齢社会の到来で、税収が減少傾向にある一方で、より多くの、よりきめ細やかな公共サービスが必要とされていきます。そんな中、市では、皆さんと一緒に「新しい公」の取組みを進めていきたいと考えています。

20～30歳代で、「新しい公」の取組みを「必要」と考える人の割合は低くはありません。しかし、実際に地域で活動する人の割合が低いということは、地域で活動する必要性を感じながらも、行動に移せていない若者が多いのかもしれない。一方、若い世代の皆さんを必要としている地域の団体もたくさんあるのです。

昨年6月に市民活動支援センターを、通勤や通学時にも便利な名張駅東口近くに移転。また、今年5月にはセンターのホームページをリニューアルしました。こうした施設も活用いただきながら、若者の皆さんも、ぜひ、地域で活動する一歩を踏み出してください。



地域政策室 室長 荻田 敏文

※「新しい公委託事業」とは、市の事業の企画立案・運営を市民活動団体に委託することで、効果や効率の向上を目指す事業です。

自治基本条例の制定をはじめ、地域づくり委員会の交流会に参加いただくなど名張のまちづくりにも詳しい帝塚山大学の中川教授に、地域社会と若者のかかわりについて伺いました。

■ 地域社会での若者の役割とは？

「若者・ばか者・よそ者」が地域を変えていくといわれます。若者には夢を見る力があり、その夢を実現させてやろうとする地元の人々のこだわりがあって地域が成長していく。さらに、地域の中だけではなく、よそからの評価があって地域は進化するという考え方です。

心理学的な言葉ですので、年齢は関係ないのですが、若い人の発想は地域を活性化させていく重要な役割があると思います。また、こうした考えに対して「それは無理だ」と一蹴してしまうのではなく、どうすれば実現できるかを、経験豊富な世代の人がアドバイスしたり、人材や予算をどう集めるかを考えたりするのも大切なのではないかと思います。

■ 若者をどのように地域に呼び込むか？

市民活動団体だと、自分たちにとって関心のある特定の課題に取り組もうと、比較的、若者も入り込みやすいと思います。

しかし、地域づくりとなると難しい。なぜなら、単に「地域のために」というと、何をすればよいのか分かりませんから。そこで、例えば、地域づくり広報紙のこのページを担当してほしいなど、何をしてほしいのかを明確にして情報発信するといいいのではないのでしょうか。また、高校や大学の学生と一緒に活動するのもいいでしょう。花壇の整備なら、園芸部と一緒に活動したり、大学のゼミの研究を地域でしてもらったりしてもいい。ただ、市内にこだわらないほうがいいですね。若者は市外からもやってくるのです。あとは、若者も気軽に立ち寄れる場所をつくらせたり、地域の祭りに気軽に参加してもらったりしてもいいと思います。

■ これからのまちづくりに必要なことは？

まちづくりにおいて地域の一員である若者にとって住みやすいかという視点は、全国的に抜け落ちている傾向にあると思います。

今後は、5～10世帯程度の単位で、若い人も含め、面識を持ち合える地域になっていけば、地域でどのような人がいるのか、どんな思いがあるのかを認識されることとなり、多くの人にとってすくすく住みやすいまちづくりができるはずですよ。



帝塚山大学法学部教授
中川 幾郎さん

まちづくりとは、「やらなければならない義務」ではなく、「住みやすくするために、自分ができること、したいことをする権利」なのですから。



「おもちや」が「おもちやドクター養成講座」を開催。受講者13人とともに、10月、「名張おもちや病院」を開院した。

「おもちゃ」が「おもちやドクター養成講座」を開催。受講者13人とともに、10月、「名張おもちや病院」を開院した。

地域で活動している皆さんへ

若者を地域の活動に呼び込もう！

異なる世代で団体を立ち上げ

「世代によって物事に取り組む姿勢や考え方が異なるのは当然。だからといって一緒に活動できないとは思いません」と話すのは、家里豊喜子さん(63歳/夏見)。子ども向けのおもちやの修理をボランティアで引き受ける「名張おもちや病院」の発起人です。今年1月、市の地域経営室に相談したことがきっかけとなり、この立ち上げに加わったのが32歳の垣中良仁さん(赤目町相原)でした。

特定の目的に応じて、若者の団体と一緒に活動

梅が丘では、自主防犯・防災隊を結成し、「自分たちのまちは自分たちで守ろう」と活動しています。7～9月の夏休み期間と年末年始に実施する夜間のパトロール

「病院」を常設したい。さらには、地域の電気店に協力いただきながら、家電の修理も手がけられればすこいですね。そう熱い意気込みを見せるのは、垣中さんのほう。一方、家里さんは、「若い人にはこうした思いを実現していかうとするチャレンジ精神や行動力がある。わたしたちの世代だけなら、『それは無理』と考えがちかも。それに、彼と出会わなければ、『おもちや病院』も、構想で終わっていたかもしれない」と話します。

には、消防団やPTAに所属する若者のメンバーも加わります。消防団員の鶴田和治さん(34歳/梅が丘)は、「地域のパトロールへの参加は、自分の子どもを守ることにもつながっている。で、当然のこと。実際に、子どもが不審者に声をかけられ怖い思いをしたこともあります。地域で役立つことはないかと考え、消防団へ入団しましたが、防犯や防災といった活動は、年配の人だけに頼るのではなく、若い人が率先して行動していくべき。それに、若くても地域に必要とされ



梅が丘では、夜間パトロールを地域のさまざまな世代のメンバーが担う。前列中央が五林さん。前列左端が鶴田さん。

老若男女皆で支えあえる社会

地域社会に居場所があって、そこにさまざまなつながりがある。必要なときには出番がある。若男女皆が支えあえる。「新しい公」の取組みを進めていくと、そんな地域がみえてくるはずですよ。そして、これは暮らしやすいまちをつくるっていいことだけに、どまらず、一人ひとりが、地域社会で、新たに生きがいや心の豊かさといったものを見いだすきっかけにもなるのではないですか。